

学生による授業評価（平成19年度後期実施分）に対する全学報告書

はじめに

本報告書は、「京都府立大学 学生による授業評価実施要領」（平成18年3月29日策定）に基づき、平成19年度後期授業科目（専任教員担当分）を対象に実施された「学生による授業評価」の結果をまとめたものである。具体的には、各学科・専攻等による「学科・専攻等報告書」を基に、「学部別まとめ」、および「全学まとめ」を付け加えたものである。「学部別まとめ」および「全学まとめ」に関しては、20年4月からの各種委員会の整理統合にともない新設された教務部委員会FD部会が作成した。

今回の調査結果については、本報告書とは別に、各教員による個別報告書が作成されている。本報告書の大半を占める「学科・専攻等報告書」は、個別報告書の検討を踏まえ、各学科・専攻等が作成したものである。一方、個別報告書については、(1a)「評価内容の全般的な傾向」(1b)「肯定的評価の概略」(1c)「批判的評価の概略」および(2)「学生による授業評価を踏まえての今後の授業改善の具体策」の項目を、学内閲覧用の本学ホームページに掲載することになっている。

「学生による授業評価」は、平成18年度前期の試行を経て、平成18年度後期から本格実施され、今回が3度目の実施であった。「全学まとめ」で述べるように、この調査は定着の時期を超え、いよいよ活用の時期へと入ってきたように思われる。それにともない、この調査のあり方について、全学から具体的な改善への提案も数多く寄せられている。

「学生による授業評価」が授業改善のために活用されながら、それ自体改善されていくことは、本学のFD活動が着実に進展しつつあることの、なによりの証である。この調査が今後とも有意義なツールとして存在し続けるよう、全学の皆様からの一層のご意見をお願いしたい。

平成20年8月4日
教務部委員会FD部会

部会長
金澤 哲

学生による授業評価に対する全学報告書（全学まとめ）

今回の「学生による授業評価」に対する「学科・専攻等報告書」および「学部別まとめ」においてなによりも注目すべきなのは、それぞれの学部あるいは学科専攻において、評価結果を基に授業改善を図っていくプロセスが着実に実施されるようになってきた点である。その意味で、本学における「学生による授業評価」は、定着の時期を超え、いよいよ活用の時期へと入ってきたと言えよう。一方、この調査のあり方について、全学から具体的な改善への提案も数多く寄せられている。そのような提案を基に、この調査をいかに改善し、授業改善に役立つツールとして発展させていくかが、今後の大きな課題である。

上に述べた点を具体的に見ていくと、まず文学部では「質問・発言の機会が十分にあった」という項目への評価が全体に低かった点に関して、学生の受け身的態度に起因するという分析が見られた。その具体的な対策としては、質疑応答の時間を増やすなどの試みが報告されているほか、教員個々の工夫を共有化するための取組みが提案されている。

福祉社会学部からは、「学生による授業評価」の結果に基づく各講座での情報交換・討論会が軌道に乗り、効果を上げてきているという報告があった。一方、同学部からはアンケート内容のさらなる精緻化への要望があり、また、教員による独自項目の設定や担当教員以外の者による回収の必要性などの指摘があった。

そのほかに福祉社会学部からは、シラバスに関する議論がなされたとの報告があった。シラバスのあり方は、現在のFDにおける中心課題のひとつであるが、今回の福祉社会学部における議論は、本学においてもこの問題が議論されるべき時が来ていることを示していると言えよう。

次いで人間環境学部では、授業改善のための具体策として、模擬授業等で教授法などを議論することが検討されているとの報告があった。また、学科によっては、専門性が高すぎて内容が理解できないことが低い評価につながったとして、レベル別授業の開講あるいは学習指導や補習といった対策の可能性に言及している。

一方、人間環境学部からの「学生による授業評価」改善の提案としては、必修選択による層別の結果表示や標準偏差の表示を求める意見の他、「学科の目的」と関連づけて授業内容を評価する設問への要望があった。また、学生の「回答慣れ」への危惧、さらにはこの調査が学生への迎合や人気取りに堕さぬよう気をつけてほしいとの意見もあった。

最後に農学部であるが、昨年度よりも高く評価された報告が多かったとされており、授業改善が一定の成果を上げていることをうかがわせる。授業改善の具体的な方法としては、「質問や発言のしやすさ」の改善のために「質問票」の活用が有効であったとされ、その普及啓発を図るとされている。

一方、農学部においても、高校における数学・物理・化学・生物がバックグラウンドとなる科目では「理解困難」という評価を得る傾向が高いとされ、人間環境学部同様の問題意識が見受けられた。ただし、授業レベルをどこに設定するかという問題については、一定の水準を維持すべきという意見が多い。さらにこの件に関しては、高校での履修内容に応じたクラス編成といった対策が言及されると同時に、カリキュラム全体を視野に入れた議論が必要との声もあったとされている。

農学部からの「学生による授業評価」への意見としては、基礎的な学問への評価が低くでがちであるとして、このような調査自体が大学に相応しくないのではないかという意見が見られた。また、「やる気のない」学生の意見に振り回されてしまうことへの危惧が見られ、評価結果への慎重な取り扱いが要求されている。

以上、各学部および学科専攻等からの報告書の内容を、概観してきた。このように、それぞれの学部あるいは学科専攻において、「学生による授業評価」は確実に授業改善へと結びつけられつつある。今後はこのプロセスの一層の定着が課題であるが、そのためには「学生による授業評価」自体の改善の他、全学FD集会などの機会を利用した種々の取り組みが必要だと思われる。

また、シラバスのあり方や学生の履修履歴の違いへの対応といった問題は、まさにFDの重要課題である。教務部委員会FD部会としては、各学部・学科専攻の意見を踏まえながら、今後これらの問題についても取り組んでいきたい。

文学部

1. 授業評価の全体的な傾向

各学科・専攻とも、評価はおおむね良好であった。高評価が多かったのは、教員の説明の明快・わかりやすさ、教員の意気込み、声が大きく、口調も明瞭でわかりやすいなどである。

一方、各学科・専攻とも共通して評価の低かったものは、「質問や発言のしやすさ」であった。このほか批判的意見としては黒板の文字の読みやすさがあり、進度についての批判も一部では認められた。

2. 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体策

「質問や発言のしやすさ」についての評価は、講義など対象科目の性格によりやむを得ないという意見や学生の受身的態度に起因するといった意見もあるが、質疑や討論の時間を増やす、教員から質問を行う、質問しやすい雰囲気を作り出すなど、授業の工夫・改善の必要性が認識され、各教員が努力している。これら各教員の努力は今後も継続されねばならないが、それらの体験を共有化するなどの積極的な取り組みも必要であろう。

授業の進度については学生のレベルによって評価が異なり、その対応は容易ではないが、学生の理解度に応じた教材選択を行うなどの工夫・改善が必要であろう。

板書については各教員のさらなる努力が求められるが、暖房、教室、機材など設備に関する不満については、大学全体として対処することが必要である。

3. 「学生による授業評価」実施上の問題点・改善点について

質問や発言の機会について、どのようなものを発言の機会と考えるかが学生によって大きく異なる上に、それに対して評価が低くとも全体の評価は高く、科目全体の評価にほとんど影響をあたえていないという現状をふまえて評価項目を再検討すべきという意見が寄せられた。また演習や講読など授業に即した設問内容を設定すべきではないか、授業達成度について「十分に達成された」「達成された」「ふつう(に達成された)」の区別が不明瞭であるため、%達成など数字で示すほうがわかりやすいのではないかという指摘もあった。このほか各教員の工夫を共有するシステム作りや、結果分析を行うことが必要という意見もみられた。

文学部 学科・専攻等報告書

I 文学科 国文学・中国文学専攻

授業評価の対象となった授業科目名

- : 国語学概論Ⅱ
- : 国文学史研究Ⅱ
- : 中国語ⅡA
- : 国文学基礎演習Ⅰ
- : 国語学演習Ⅰ
- : 国文学演習Ⅰ
- : 中国文学演習Ⅰ

1 授業評価の全体的な傾向

全般的には評価はおおむね良好とあってよいが、授業によって多少の差が認められた。明快で分かりやすい、面白いといった評価が多かったが、他方で、難しすぎると、説明が不足しているという意見もあった。中には同一の授業で両方の評価が同居している例もあり、これは学生ごとに能力や意欲の差があることの当然の反映と思われるが、できるかぎり多くの学生が十分に理解可能で、しかもレベルの高い授業を目指す必要があるものと思われる。また、黒板の文字の読みやすさについては、全体に評価が低かった。そのほか、比較的评价が低かったのは、質問や発言の機会についてであるが、これはそもそもどのようなものを発言の機会ととらえるかについて学生の個人差が大きく、教員の対応に対する評価も分かれがちであることの反映という面がある。具体的には、演習で教員が指名して意見を求めることを発言の機会と見るかどうかについては、学生の間で意見が分かれるように思われる。また、多人数を対象とする講義科目については、非常に積極的な学生を除いては質問に来ることは通常少なく、当然この項目についての評価は低くなりがちである。この項目の評価が低かった科目であっても全体の評価は高く、科目自体の評価にはほとんど影響していないように思われる。この点は、評価方法について考えるべき問題であろう。

また、設備に関しては、今回も冷暖房・机・椅子などについて多くの不満の声寄せられた。この点については、ある程度対応もとられており、また専攻で管理する演習室などについては学生が自主的に改善に取り組んでいるが、おのずから限界がある。これは大学全体で対処すべき問題であろう。

2 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体策

基礎的な事柄も抜かすことなく、高度な内容はできるだけ分かりやすい言葉で丁寧に説明するように心がける。板書はきれいにわかりやすくするようつとめる。また、学生の側からの発言や質問をしやすい環境を整えるよう努力する。

II 文学科 西洋文学専攻

授業評価の対象となった科目名

- ：英語英米文学基礎演習 II
- ：英文学演習 III A・III B
- ：英語 IA（史・福祉）
- ：アメリカ文学史 b
- ：英語ライティング実習
- ：ドイツ文学概論／ドイツ文学概論 B

1. 授業評価の内容の全般的な傾向

特に低い評価を受けた授業はなく、全般に大きな問題はなかった。

大まかな傾向としては、「教員の説明・指導は明快で、ポイントが分かりやすい」、「声が大きく、口調は明瞭で分かりやすい」、「授業に熱意や意気込みが感じられる」への評価がほぼ全員 4.0 以上であり、高い評価を受けることができた。

それらに比べて、授業中の質問や討論の機会についての項目では、平均評価が 3.26 にとどまった。対象となった授業の性質上やむを得ない部分もあったように思われるが、一層の工夫が必要である。

2. 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体策

- ・ 質疑応答の時間を確保するため、授業内容をさらに精選したい。
- ・ 実習の授業でも、プリントや視覚教材を工夫して用いたい。
- ・ 学生の注意を引きつけるために板書を多く用いてきたが、今後は視聴覚教材も適宜取り入れていきたい。
- ・ 毎回の授業での小テストの実施が、予習／復習の習慣づけに効果的であり、今後も続けていきたい。
- ・ 授業で扱える量には限度があるので、分量の多いテキストはなるべく選ばないようにする。

- ・ 演習において、グループ討論の機会を増やす。

Ⅲ 史学科

授業評価の対象となった授業科目名

- ： 日本文化史史料講読Ⅱ
- ： 東洋史史料講読Ⅱ
- ： 日本古文書講読Ⅱ
- ： 日本史概論Ⅱ
- ： 東洋史概論Ⅱ
- ： 考古学研究法Ⅱ
- ： 宗教史概論
- ： 西洋史演習Ⅱ

1 授業評価の内容の全体的な傾向

- ・ 理解度や目的達成度については科目によって若干のばらつきはあるが、学生の授業内容に対する興味は概して高い。
 - ・ 講義科目で質問や発言のしやすさの項目でやや低い評価を受けることがみられた。
 - ・ 説明のわかりやすさが必ずしも内容の十分な理解に結びつかない場合がある。
- ※なお、グループ分けなど講読の授業に向かない項目の改善を望む声が複数あった。

2 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体策

- ・ 質問や発言のしにくい事情については、もう少し具体的内容がわかるデータをもとに分析する必要がある。
- ・ 質問の内容をみると基礎的な事項に理解が及んでいないことが伺われるものがあることから、学生の基礎的な知識を確認する場があつてよい。専門科目の基礎演習などの活用について考えていきたい。

Ⅳ 国際文化学科

授業評価の対象となった授業科目名

- ： 文学Ⅱ

- : 日本文化基礎講読 I a
- : 中国文化論 II
- : 朝鮮文化論 II
- : 英語 II A
- : 国際文化演習 I A II A
- : 言語文化研究 II
- : 国際文化英語実習 II

1 授業評価の内容の全体的な傾向

- 一部にやや評価の低いものも見られるが、全体的には平均をやや上回る評価であった。
- 説明のわかりやすさ、指導の明確さ、熱意・計画性などの項目において特に高い評価があった。
- 「質問や発言の機会」があるかどうかについて、全般に低い評価があった。
- 教室の空調設備、機材に対する学生の不満があいかわらず多かった。

2 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体策

- 従来からもっとも低い評価を受けている項目は、「質問や発言の機会」があるかどうかについての項目であるが、今回もその評価は全般に低かった。対象科目の性格により、どうしても低い評価が出やすいという事情もあろうが、その中においてもこの項目の改善が必要となろう。ただし、教員の側から「質問や発言の機会」が封じ込められていたということなのか、物理的に「機会」はあったがたまたま学生側からの積極的な参加がなかったということなのか、それとも他の理由によることなのか、といった個別の事情を、各教員がそれぞれの授業の中で手探りでさぐっていくことが重要であり、それを踏まえて対処したい。

また、実習等で欠席となる学生への配慮を求められる場合があるが、そのさいの手続きがまちまちで、授業担当の教員が混乱することがある。全学的なレベルで解決策を考えるべきではないか。

福祉社会学部

1 授業評価の内容の全体的傾向

全体として、概ね良好な評価であった。もちろん「学生の自己評価」あるいは「学生による授業評価」で平均を下回った科目もあるが、特別に問題のあった講義はなかった。

各教員は、前年度学生から批判を受けた部分を改善し、その部分が、改善された教員が多く、学生の評価を取り入れ、講義の改善が実現できている。

学生からの授業評価の結果に基づく各講座での情報交換・討論会が軌道に乗り、効果をあげてきていると言うことができる。普段はなかなか実現できない、教員間同士の情報交換や学生の印象などを共有できる機会が半期に一度あるのは、講義改善だけではなく教員の教育技術向上にも確かな効果があり、今後も、アンケートの内容をさらに精緻化し、教員間の情報交換がより具体的で、スキルアップにつなげることが望まれる。

前回に引き続き、学生からもっとも多く指摘された批判は、講義というソフトへの批判よりも、ハード面である教室の施設・設備面での具体的な批判であった。ソフト面が改善できていることで、さらに学生は施設への不満を強く持っている。どれだけソフトが改善しても、ハードが足を引っ張っているのは、改善にも限界がある。大学教育の基本である「学習者中心の大学」を実現するためにも、京都府立大学の課題は、「施設改善」である。できるだけ早急に手を打たないと教員一人一人の努力も水泡に帰すであろう。

2 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体策

「質問、発言の機会が多い」については多少の改善はあったものの、全体的に低い傾向であった。中規模以上の講義では講義中に質問を投げかけることも、またそれに答えることも環境的に難しい。20年度前期以降は授業アンケートの質問項目も変更されるため、それへの評価を待ちたい。

また、今回は、シラバスに関して議論が持たれた講座があった。シラバスは、学生と教員の講義における「契約書」であり、講義の内容、評価の方法、テキストの指定など、重要な項目があるにもかかわらず、その水準にあまり関心が払われてこなかったのではないだろうか。今後は、大学教育の質、講義の質を高めることを念頭に置いた「学習者中心」のシラバス作成を心がける必要がある。そのためには、教員、事務職員のシラバスに関する一定の共通理解を得る必要があるだろう。統一された水準で作成されたシラバスは、なにより学生の利益となる。今後も継続して議論を行いたい。

3 「学生による授業評価」実施上の問題点・改善点について

今回、受講者別に分析したことで、大規模講義は厳しく、小規模講義は肯定的な結果が出るのが明らかになった。これに加えて、教室ごとの評価も加えると、施設が悪影響を与え、講義の質が落ちている講義が抽出でき、より具体的な施設改善、講義改善につなげられるであろう。

またこの間、本アンケート方式に関する改善として、①匿名性を保障するために、調査用紙の回収を担当教員以外の者がやるべきではないか、②各教員が独自の設問を設定できるような工夫があってもよいのではないか、③自由記述の中で、講義に関してよかった点、印象に残った点など、肯定的な面をもっと積極的に述べてもらうのも有益ではないだろうか、等の意見がある。講義を担当した教員を目の前にして、素直な意見を述べるのは難しいであろうから、配布は教員がするにしても、提出場所は、教務課にしてはどうかという意見が出た。

福祉社会学部 学科・専攻等報告書

I 福祉社会学科 法・経済学講座

授業評価の対象となった授業科目名

- : 法律学概論 I B
- : 行政法 I
- : 社会法
- : 財政学
- : 地域経済論
- : 専門演習 I

1 授業評価の内容の全体的な傾向

- ・ほとんどの授業科目が、全体の平均値で全学平均を上回った。すべての項目について、突出した高い評価を得た授業もある。
- ・「教員の説明・指導は明快で、ポイントが分かりやすい」、「声が大きく、口調は明瞭で聞き取りやすい」の項目については、すべての授業科目に共通して、高い肯定的評価を得た。
- ・「授業に熱意や意気込みが感じられる」の項目も、ほとんどの授業について評価が高い。
- ・「授業の進度は適切であった」、「計画的で筋道だった授業であった」、「自分にとって興味深く充分に受講した価値があった」の項目については、評価の低

い授業が複数あった。

- ・調査対象は一つであったが、演習はきわめて高い評価を得た。
- ・「プロジェクターのフィルターを掃除して欲しい」、「冷暖房をもっと早くつけて欲しい」など、設備・機器の利用に関する不満、要望が多かった。ホール1での授業については、回答者55名のうち13名から、「教室が寒い」、「暖房が効いていない」といった指摘があった。

2 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体策

- ・身近で具体的な話をこれまで以上に取り入れ、受講生の授業に対するモチベーションを高める。
- ・予習を促す。
- ・授業内容について質問を受け付ける時間を設け、理解度を把握しながら講義を進める。
- ・視聴覚教材を積極的に取り入れるなど、理解や関心を高める方法を考える。
- ・やや難解な内容を扱う場合には、よりゆっくり丁寧な解説を心がける。そのために、各回ごとの内容量を柔軟に変える。
- ・板書を丁寧にすることを心がける。
- ・引き続き、学生の社会的関心を引き出しつつ、自主性を尊重したゼミ運営に心がけていきたい。学生主体による報告書作成は今後も続けたい。などである。

II 福祉社会学科 福祉・社会学講座

授業評価の対象となった授業教科名

- ：社会福祉概論
- ：ケースワーク
- ：社会福祉援助技術演習
- ：社会福祉史
- ：社会学概論Ⅱ
- ：社会病理学
- ：障害者福祉論

1 授業評価の内容と全体的傾向

- ・講座全体としては優秀であり、全体平均をかなり上回っている。

- ・個々の教員が昨年度の自分の授業評価と比較して、改善策を講じている。
(授業形態・授業規模別の集計が参考になる)

2 学生による授業評価をふまえての授業改善の具体策

- ①シラバスを改善・向上させること（学生が参照している）。
- ②板書の効果を見直すべきであること（ノート筆記の学習効果を再認識した。
なお、施設改善について、ホワイトボード化の要求があった）。
- ③引き続き、質問等の機会を保障すること。

Ⅲ 福祉社会学科 教育・心理学講座

授業評価の対象となった授業科目名

- ：実験計画法
- ：発達心理学
- ：社会科・地歴科教育法
- ：社会心理学
- ：教育学概論Ⅱ
- ：生涯学習論Ⅱ

1 授業評価の内容の全体的な傾向

学生の自己評価の平均が、全体として全学平均より高かった科目が2科目、ほぼ同じであったものが3科目、低かったものが1科目であった。

全体として、1(c)①「予習、復習や関連する自習勉強は大いにした」という項目の評定値が低いことが問題となった。

学生による授業評価の平均については、全学平均より高いものが3科目、ほぼ同程度のものが3科目という結果であり、全体として良好な結果であると言える。

なかには3①「教員の説明・指導は明快で、ポイントが分かりやすい」4.90、3⑩「自分にとって興味深く十分に受講した価値があった」4.86という高い評定値を得る講義もあった。総じて、前期の授業評価よりも各科目とも評定値が高くなっている。また特別に問題となる授業科目、質問項目はなかった。

2 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体策

上記の、学生の自己評価 1(c)①の評定値が全体として低い水準に留まっていることについて、議論がなされた。この項目の評定値を上げるためには、自学自習のための独自の支援体制を保障することが必要であり、まず第 1 に、学内の学習施設の整備・充実をはかることの重要性が指摘された。またすぐにでも可能なこととして、各教室の外に、あるいは全学的な掲示版(あるいは携帯メール)に、「空き教室情報」を提供するという提案もなされた。また、第 2 には授業展開の工夫が必要であり、例えば予習・復習の課題を明確にする、次回の講義に必要な資料を予習用に提供する、などの提案があった。

また、今回、講義参加者の規模別に集計表が公表されたが、これはきわめて有用であるという意見が多かった。

講義室等の整備の問題では、不十分点が数多く出された。第 7 講義室のマイクが切れる問題は今回改善されたが、今度はその他の教室で音響施設等の不備が指摘された。

人間環境学部

1 授業評価の内容の全体的な傾向

前々回、前回と同様に、学科・専攻内で科目により、ばらつきが見られるが、「興味を持って授業に参加」、「熱意や意気込み」、「出席した目的の達成」など、平均すると学生の満足度は比較的高い傾向にある。また、「プリントや視聴覚教材」の項目で高い評価が得られていることが共通しており、評価の高い一部の科目では、わかりやすい教材・視聴覚教材・プリント資料の準備や利用が評価されている。科目による違いや改善が認められたものもあるが、「質問や発言の機会」、あるいは「声の大きさ、口調」、「黒板の文字や図」、「理解できる内容」などの項目で、評価が低い傾向にある。

2 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体策

学科では、問題の解決法、模擬授業等で教授法等を議論することなどが検討されている。

板書の文字の大きさ・量・丁寧さ、マイクを使うことも含めた声の大きさと口調、発言や質問がしやすい工夫、出来れば配付資料や視聴覚教材の導入、などの改善の努力が検討されている。内容が理解できない学生に対して、基礎教養なども丁寧に分かりやすく説明する、宿題や演習問題について模範解答を丁

寧にする、予習・復習を指導する、レベル別授業・小テスト等の活用、可能ならば学習指導や補習、などの具体策が検討されている。実験・演習科目においては、マンツーマンによる丁寧な指導等を心がけることが検討されている。

3 「学生による意見調査」実施上の問題点・改善点について

以下のような意見があった。

学科内で改善策を検討、効果を検証する。「理解できる内容であった」の項目を意味付けるために「授業内容は、学科の目的を達成する上で適切なレベルであったか」を加える。ノート・視聴覚教材・黒板などの使用など授業形態は多様であるため整理も必要。学生への迎合や人気取り、さらには教育の質の低下につながるようにしてほしい。演習科目に対する適切な評価手法を考えたい。自由回答を求める設問に授業評価の設問項目や質問の仕方を含める。教員の反省・改善の目安として評価できる。授業規模による分析は参考になった。必修選択による層別や評価の標準偏差の表示などがあればよい。学生の「回答慣れ」も課題である。自己評価と授業評価の結果のグラフは線種とシンボルが類似しコピーすると白黒で識別困難。オムニバス形式のものは担当期間直後に調査してほしい。調査用紙数に不足がないように準備してほしい。「完全に理解できる」の評価が理系と文系で異なると考えられ平均に意味があるのか。勉強したい学生としたくない学生にわけて評価結果をまとめる。

人間環境学部 学科・専攻等報告書

I 食保健学科

授業評価の対象となった授業科目名

- : ライフステージ栄養学
- : 病態栄養学
- : 生化学
- : 分子生物学
- : 食事安全性学
- : 食生活環境論
- : 栄養教育論 II・栄養教育論実習
- : 給食経営管理論
- : 栄養疫学

1. 授業評価の内容の全体的な傾向

ほとんどの授業において学生が興味を持って授業に参加している。また教員の熱意も伝わっている内容であった。前回指摘のあった質問の時間の確保については、改善が認められる内容であったが、依然として改善の必要があるとの指摘がなされている。

授業の進行が早い、内容が難しい等の意見が見られた。これらの問題は、興味を持たなかった授業で指摘されていることが多い。授業のプレゼンテーションに関する改善意見が見られ今後、この点の改善が必要である。

2. 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体策

学科で今回の結果を周知し、問題点を共有し、その解決について議論する。模擬授業等の機会を利用して、学科で教授法等を議論する。また、興味を持って授業の進行についてゆけない学生、また内容が十分に理解できない学生へ、予習・復習を効果的に行うように指導する。

II 環境デザイン学科 住環境学専攻

授業評価の対象となった授業科目名

- : 建築史 I
- : 環境物理学
- : 環境心理行動学
- : 建築防災計画学
- : 構造力学実験及び同実験法, 建築材料実験及び同実験法
- : 住環境設計演習VI
- : 情報処理演習

1 授業評価の内容の全体的な傾向

講義科目については、各科目でばらつきが大きいですが、概ね「プリントや視聴覚教材が効果的である」の評価が高く、授業への工夫が見られる。一方で、「黒板の文字や図はていねいで分かりやすい」の評価が低い科目がある。実験・演習科目については、授業設備が評価に大きく影響していると思われる。履修人数に対して設備やスペースが不足している科目は評価が低くなる傾向がある。講義科目と実験・演習科目いずれも、自然科学系の科目は学生により授業内容

の理解度が大きく異なり、「理解できる内容」の評価が低い。これらの科目の理解度は、各学生の数学や物理の基礎知識も関係していると推察される。

2 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体案策

- 講義科目について、次の改善策が示された。
 - 1) 板書の文字等は、時間をかけても大きく明瞭に書く。
 - 2) 声の大きさと口調については改善に向けて努力するが、マイク・スピーカーなどの教室設備の充実も要すると考える。
 - 3) 基礎教養などを含めて授業で必要な事項は丁寧に分かりやすく説明する。
 - 4) 宿題や演習問題についても、授業中に模範解答を丁寧に解説する。
 - 5) 自宅学習（予習・復習）を促す工夫について検討する。
- 実験・演習科目について、次の改善策が示された。
 - 1) 学生の出席管理を徹底し、マンツーマンによる丁寧な指導（学生との一緒に作業）に心がける。
 - 2) 実験の待ち時間には演習を課すなどして無駄な時間を作らない。
 - 3) 各学生の情報処理ソフトの習熟度を測りながら進度を調整する

Ⅲ 環境デザイン学科 生活デザイン専攻

授業評価の対象となった授業科目名

- ：デザイン史（講義）
- ：環境共生デザイン論（講義）
- ：ランドスケープデザイン論（講義）
- ：色彩学及び演習（講義）
- ：生活美学（講義）
- ：生活デザイン演習Ⅱ（実験・実習・演習）

1 授業評価の内容の全体的な傾向

学生の自己評価は、講義平均 3.30（演習 3.72）に対して、本専攻では、3.21 から 3.50 まで（演習 4.0）、ある程度の幅が認められた。一方、学生による授業評価は、講義平均 3.80（演習 3.98）に対して、本専攻では授業の平均が 4.17（演習 3.58）となっており、講義科目の評価平均をかなり上回っている。また、「この授業に出席した目的はどの程度達成されましたか。」は、講義平均 3.69 に対して、専攻全員の平均が 3.97 と高い評価を得たことは、特筆すべきことである。

その他、「プリントや視聴覚教材が効果的」「授業の進度が適切」などの項目で高い評価を得られた。

一方、授業評価で指摘された改善点としては、「質問や発言がしやすい」「声が大きく口調は明瞭で聞き取りやすい」などの項目で、やや低い評価が認められた。

2 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体策

発言や質問がしやすい雰囲気や授業内容を工夫する、学生の方を向いて大きい声で講義する、声が小さいのでマイクを使う、などの改善の具体策が個別報告書から出された。

同時に、教室環境の再検討（特に冬季の講義室が寒いことや、講義室のマイクの不調についての対応）、などの今後の対策が提示された。

IV 環境情報学科

授業評価の対象となった授業科目名

- : 量子力学入門
- : 基礎物理学Ⅱ
- : 化学Ⅱ
- : 有機化学Ⅱ
- : 環境生物学
- : 基礎生物学Ⅱ
- : 生物学Ⅱ
- : 知能情報処理
- : プログラミング演習
- : 基礎数学及び演習 BⅡ・応用数学Ⅱ

1 授業評価の内容の全体的な傾向

学科全体としては、上記授業の評価はおおむね平均かやや平均を下回る評価であった。一部、評価の高い科目も存在していた。評価の高い科目では、わかりやすい教材・視聴覚教材・プリント資料の準備や利用、明瞭で大きな声での講義などが評価されている。

評価の低い科目においては、専門性が高すぎて内容が理解できないことに起

因する指摘が目立っていた。これらは、従来の講義評価に共通している傾向である。理解度を上げられるような授業改善がポイントになると考えられる。しかし、従来から指摘されているように受講する学生の基礎学力や熱意に大きな開きがあり、分かり易さと専門性につながる講義レベルのバランスが課題となっている。

2 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体策

受講学生の基礎学力のレベルや熱意の違いに対応するために、可能な科目については、レベル別授業の開講などの工夫が必要である。理解度を客観的に捉えるために小テスト等を活用することも有効であろう。その上で、可能ならば理解度の低い学生について、学習指導や補習も必要かもしれない。

配付資料や視聴覚教材の効果的な導入は学生の評価が高い。導入が難しい講義も多いと思われるが、適宜導入を検討することが望まれる。板書の量や丁寧さなどの技術的問題については改善に努力する。

農学部

1 授業評価結果の全般的傾向

全般的傾向として、全学平均と比べて同程度かやや良いとする肯定的な評価が多かった。また、昨年度よりも高く評価された報告も多かった。特に、低学年を対象とし、かつ、受講生が多い科目では評価が下がり、高学年を対象とする少人数のクラスでは評価が高くなる傾向があるように見受けられたので、高学年を対象とする少人数クラスの専門的な授業が比較的多い農学部では、全般的に肯定的な評価が多くなったものと思われる。

「板書、声の大きさ」についてはかなり改善されてきているものの、なお、一部に評価が低い科目が残っており、引き続き改善を要する。

授業の理解度については、全学生に基礎的な知識を教授する講義（必修科目が多い）では、比較的理解度が高い傾向にあるが、一方で、レベル的に物足りなさを感じている学生もいる。専門性が高い講義については、高校における数学、物理、化学、生物がバックグラウンドになる科目では、「理解困難」といった評価を得る傾向が強く、批判的な評価につながっていた。今後、授業のレベルをどこに設定するかで学生の評価は大きく変わるとと思われる。教えるべき内容の範囲にも関わる問題であるが、一定の水準は維持すべきであると考え教

員が多い。プリントの配布や視聴覚教材の利用は高く評価されていたものが多い一方で、授業環境（インフラ）の劣悪さを指摘している意見も多かった。

2 学生による授業評価を踏まえての授業改善の具体策

「質問や発言のしやすさ」や学生の理解度を把握する方法としては、「質問票」が有効であったので、そうした取り組み事例についての普及啓発をはかり、授業の改善に結び付ける。「板書、声の大きさ」については、あらためて教員に周知し改善を促すが、声の大きさについては、マイクの不調や充電不足が原因との指摘もあった。

施設関係の問題としては、毎回指摘されていることであるが、教室が狭いこと、空調むらがあること、照明が暗いことなどが指摘されており、改善する必要があると思われる。その他、実験器具の不足も指摘されている。

授業の理解度を改善するには、高校における理科や数学の履修内容に応じたクラス編成が考えられるが、この改善案については、教員確保や教室確保の問題があり、改善というよりは抜本的な改革が必要である。さらに、理解度に応じた授業内容の整理と時間配分の見直しが必要との指摘があり、プリントの配布や視聴覚教材の利用が有効との意見も多いので、その方向で、今後とも授業改善の努力を続けていく必要がある。しかしながら、まずは学生に興味を持たせるように仕向けることが必要であり、どのような取り組みやカリキュラム編成が可能かを学科単位で議論する必要があるとの意見もあった。この点については、新学部の新カリキュラムの中で改善していく必要があろう。

3 「学生による意見調査」実施上の問題点・改善点について

一度聴いて理解できる概論や意味合いのつかみやすい応用学的な授業についての評価が高く、基礎的な学問の評価は低く出がちであると思われる。これが果たして「最高学府」としてふさわしい評価方法なのかはかなり疑問である。中学、高校ですら、予習復習をして初めて理解する内容のことが多いはずであろうが、最高学府である大学においてはその辺りが軽視されてあまりにも「出来ない」という名の下に「やる気のない」生徒の意見に過敏になりすぎて、最高学府としての大学学問の本質を失わないかが危惧される。それゆえに、評価点数の取り扱いについては慎重に対処する必要がある。

農学部 学科・専攻等報告書

I 生物生産科学科

授業評価の対象となった授業科目名

- : 作物学総論
- : 作物学各論
- : 基礎生物学 II
- : 果樹繁殖学
- : 花卉園芸学
- : 栽培学概論
- : 植物感染機構学
- : 植物病害管理学
- : 応用昆虫学概論
- : 害虫各論
- : 動物管理学
- : 農業経営学総論
- : 細胞工学概論
- : 植物生態学
- : 科学英語 II
- : 植物生産基礎実験 II
- : 生物生産専門実習及び同実習法
- : 情報処理演習

1. 授業評価内容の全体的傾向

個別質問事項に対する評価点が全学平均値からずれる場合もあるが、どの講義の平均評価点もおおむね、全学平均値に近似しており良好であったと判断された。好評価を受けた項目は、講義の計画的な構築と進行管理、プリント、パワーポイントの利活用が効果的であったこと、説明が丁寧で分かりやすい、などがあった。これは、これまでの評価をとおして教員が改良を加えてきた結果であろう。ただ、講義によっては内容が高度であるため、学生が理解しづらかったものもあるようだが、これは教員だけでなく学生の努力が求められるものである。批判的な項目は、板書、声の大きさなどに難を感じる学生がいた点があげられる。これについては、教員各自も適切な対応をする必要があると認識しているので、今後改善されると期待される。実験は時間配分が難しく、また複数の教員がリレー形式で行うため、従来、評価が低くなる傾向があったが、今期の結果は良好であった。これも、教員が様々に改良を加えた結果であると思

われる。学生から低い評価を受けたものは、講義の内容よりも、部屋の狭さ、空調、照明などのインフラに対するものであった。これについては大学の調査とそれに伴う改善が求められる。

2. 学生による授業評価をふまえての具体的な改善策

講義の内容や進めかたで教員の努力により改善できるものは個別に対応する。ただ、個別報告書のいくつかにも指摘されていたが、学生のアンケートの方式にはさらに改善が必要と思われる。同じような質問事項に対して相反する評価を受けるのには理解し難いものがある。また、学生が真摯にアンケートにこたえてくれているのかはアンケート結果をみる教員にも一抹の不安を感じることがある。これについてはアンケート結果がもたらす意味を学生に良く理解させた上で「授業評価」をしてもらう努力がさらに必要である。

II 森林科学科

授業評価の対象となった授業科目名

- : 砂防学Ⅱ
- : 森林保護学
- : バイオマス利用学（リレー）
- : 森林植物学実験及び同実験法
- : 木材物理学Ⅰ
- : 森林植物学
- : 木質生化学
- : 森林計画学Ⅰ
- : 情報処理学演習（分担）
- : 木質材料学Ⅰ
- : 森林計測学Ⅱ
- : 造林学
- : 測量学Ⅱ

1. 学生による授業評価の結果について

（a）評価内容の全般的傾向

評価は概ね良好であり、全学平均並みか、あるいは、全学平均を上回る評価が多かった。授業が「理解できる内容」であったかどうかについては、やや低

く評価された場合が複数あったが、これについては、やや難しい内容が含まれていた場合と、物理学的要素を多く含むため高校時代に物理を履修していない学生にとっては理解がしづらい場合との2通りがあった。また、「質問、発言のしやすさ」についても、やや低く評価された場合があったが、専門科目では、講義や説明が中心にならざるを得ず、質問はともかく、発言を求めるような授業ではないとも言える。

(b) 肯定的評価の概略

教員によって若干の傾向の違いがあるものの、各項目にわたり肯定的評価が多かった。「開講表と実際との一致」、「声の大きさ、口調」、「黒板の文字や図」、「授業の進度」、「理解力の考慮」、「計画的な授業」などにおいて、高く評価されていることが多く、授業改善に向けた教員の努力の跡が窺えた。

(c) 批判的評価の概略

批判的な評価は少なかったものの、一部ではなお、「声の大きさ、口調」、「黒板の文字や図」が指摘されていた。「プリントや視聴覚教材」、「質問や発言の機会」、「熱意や意気込み」、「受講価値」などが若干低い評価となっている場合も散見された。

施設・設備に対する批判的指摘も少なからずあった。今後は、授業評価とは別に、施設・設備に関する評価も実施すべきであると考えている。

(d) その他、特記事項

講義と実習の連携、質問票の配布、小テストの実施などが好評であった。

専門の選択科目の場合は、所属する研究室の違いによって、学生の理解度が異なることが多いので、教育内容の水準をどのあたりに設定するかが難しい。

(e) 評価内容に対する感想

授業内容に対する理解度については、内容が少し易しかった場合には高く評価され、講義内容が盛り沢山すぎた場合などは低く評価される傾向が見受けられた。後者の場合は、「受講価値」、「教員の説明・指導」、「質問や発言の機会」の項目も低く評価されることが多かった。

教員の感想としては、「学生評価はある程度出席し、予習・復習を行う学習態度が良好な学生を対象とすべきであり、全講義終了での最後の短い時間では正確な評価・記述ができないと考える」という意見もあれば、「まじめな評価が多く、こちらが努力した点、至らない点をよく見ていたように思われる」との受け止め方もあった。

2 授業評価の内容を踏まえての今後の授業改善の具体策

一部の教員に対して指摘を受けた「声の大きさ、口調」、「黒板の文字や図」

については、今後とも改善の必要がある。

授業内容については、改善が進みほぼ完成に近い段階にあって高い評価を得ている授業もあれば、他方では、内容や量について引き続き改善が必要なものもあった。

質問の機会を作ることについては、質問票を配布するという改善策が多かった。

視聴覚機材の活用についても、意欲的な意見が多かった。

実習については、理解度に差が出ることへの対応が難しいとの報告があり、T Aの充実が望まれる。実験・実習器機の増加や更新も必要である。

Ⅲ 生物資源化学科

授業評価の対象となった授業科目名

- : 分析化学
- : 土壌環境学Ⅱ
- : 生物化学Ⅰ
- : 生物資源化学実験Ⅰ
- : 食品機能化学
- : 分子栄養学Ⅰ
- : 醗酵生理学Ⅱ
- : 科学英語Ⅱ
- : 生物高分子学Ⅰ
- : 有機化学
- : 化学実験及び同実験法
- : 分子遺伝学

1 授業評価の内容の全体的な傾向

2回生に担当されている基礎的内容の修得をめざす講義科目においては、学生の基礎学力の個人差も大きいため一部に難解であるなどの意見も見られるが、講義には多様な工夫がなされており、確実に学力の向上につながっていることが伺える。すなわち3回生に担当されている講義科目では、さらに内容が深化した講義が多いにもかかわらず高い評価を受けているものが多いことから、2回生での基礎科目の講義が学力向上に役立っているものと思われる。さらに学生実験はいずれも高い評価を受けている。

2 学生の授業評価を踏まえての授業改善の具体策

講義内容が難しいとの評価を得た科目では、授業内容の整理と進め方の見直しをおこなう。プリントや視聴覚教材を利用している科目は比較的好評であるので、要所では積極的に用いる。さらに、小テストなどで学生の理解度を測りながら授業を進める。学生実験等については継続して行う。